国立国語研究所学術情報リポジトリ

〈共同研究プロジェクト紹介〉基幹型：日本語レキシコンの音韻特性「ピッチアクセント体系」の多様性

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2015-10-30 キーワード: 作成者: 窪薗, 晴夫, KUBOZONO, Haruo メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00000761

国語研プロジェクトレビュー
NINJAL Project Review　Vol.5 No.1 pp.1–7（June 2014）

「ピッチアクセント体系」の多様性

Varieties of Pitch-Accent Systems

窪薗 晴夫（KUBOZONO Haruo）

1. はじめに

本プロジェクトは日本語音声の中から「アクセント」と「促音」を選び，これらの特徴を対照言語学，言語類型論の観点から考察することを主な目的としている。過去 4 年半の研究は，毎年開催する国際シンポジウムを起点にして，そこで発表された成果を論文集等にとりまとめる形で進展してきた（過去の国際シンポジウムについては補遺 1 を，主な刊行物については補遺 2 を参照）。本稿では，これまでのプロジェクト成果の中から，第 1 回国際シンポジウム（ISAT 2010）の主要テーマであった「プロソディー体系の類型」を取り上げ，近年の音韻論研究の中で問題視されることもある「ピッチアクセント体系」についてプロジェクトの成果を報告する。詳細については，このシンポジウムの成果物である *Lingua* 特集号（*Lingua* 122：Special issue on ‘Varieties of Pitch Accent Systems’）を参照されたい。また，プロジェクト全体の活動および成果についてはプロジェクトのホームページ http://www.ninjal.ac.jp/phonology/ をご覧いただきたい。

2. プロソディー体系の類型

伝統的な音韻類型論によると日本語は「ピッチアクセント」に区分される。これは一方では語アクセントの類型（1）によるものであり，他方ではピッチ（高さ）をどのレベルで弁別的に用いるかという類型（2）による。

（1） ピッチ（高低）アクセント⇔ストレス（強弱）アクセント

（2） トーン（声調）言語
⇔ピッチアクセント（語アクセント）言語
⇔イントネーション言語

日本語の研究では日本語諸方言の語アクセントが「ピッチアクセント」であることは当然のこととして受け入れられている。その前提となっているのが「ピッチアクセント言語＝ピッチを単語レベルで弁別的に用いる言語，もしくはピッチによって語レベルの型が決まる言

語」という定義である。この定義自体には問題がないように思われるが，その一方で，一般言語学・音韻論の観点からは様々な問題点が指摘されている。その中でも重要なのがピッチアクセント体系の多様性をめぐる問題である。たとえば，同じ「ピッチアクセント」に分類される言語でも，日本語のピッチアクセントはスウェーデン語やバスク語のピッチアクセントとはかなり異なる。また日本語内部を見ても，諸方言のアクセント体系にはアフリカのトーン言語的な体系から英語のようなイントネーション言語的な体系が存在する。「ピッチアクセント（体系）」といっても，その中には様々な体系が混在しているのである（Igarashi 2012, Kubozono 2012b, Uwano 2012）。日本語とスウェーデン語の「ピッチアクセント」を比較しただけでも（3）のような違いが観察される。

（3）　a. 日本語（東京方言）
・強勢（stress）なし
・ n 音節の語（名詞）に n＋1 個のアクセント型
・無アクセント語（平板型，無核，unaccented）あり
b. スウェーデン語
・1 語に一つの強勢（stress）
・強勢音節に二つのアクセント型（Accent I, II）
・無アクセント語なし

日本語（東京方言）ではピッチアクセントと独立して強勢（stress）を想定する必要はなく，名詞であれば n 音節の語に n＋1 個のアクセント型が現れる。n 個にならない理由は，どの音節にもアクセント（＝アクセント核）が付与されない無アクセントの語（unaccented word, 平板型，無核語）が許容されるからである。これに対してスウェーデン語では，どの長さの語にも二つのピッチアクセント型が許容されるが，この特徴が付与（具現）されるのは語の強勢音節だけである。つまり，強勢という概念が先にあって，この特徴を付与された音節のみに二つの異なるピッチアクセント型が現れることができる。さらに，日本語（東京方言）とは異なり，ピッチアクセント特徴を持たない無アクセント語は存在しない。

このように，日本語とスウェーデン語の体系は同じ「ピッチアクセント体系」という名称で呼ばれながらも，実際の中身は大きく異なっている。Hyman（2006）等の研究者が「ピッチアクセント体系」もしくは「ピッチアクセント言語」というプロソディー類型に異議を唱える大きな理由がここにある。「ピッチアクセント体系（言語）」というカテゴリーの中に様々な体系が混在しており，同じ「ピッチアクセント体系（言語）」という用語を用いていても，その中身に均一性がないという批判である。

この批判に対して，上記 *Lingua* の特集号に掲載された Jose Hualde の論考が一石を投じている。Hualde はバスク語（Basque）の諸方言が見せるアクセント体系の多様性に取り組んできた研究者であるが，彼はバスク語の中に（3a）で述べた東京方言タイプのアクセント特徴を持つ方言（Coastal Bizkaian Basque）と，（3b）にあげたスウェーデン語のような特徴を持つ

方言（Western Navarre Basque）が存在することを指摘し，両者が共通の祖語体系から歴史的に発達したというシナリオを提案している。同じ言語の中に日本語タイプとスウェーデン語タイプの方言が存在すること自体が興味深い事実であるが，Hualde はこれらの一見異質と見える二つの体系が共通のアクセント体系から派生できることを論証したのである。Hualde のこの研究により，日本語のようなピッチアクセント体系とスウェーデン語のようなピッチアクセント体系を同じ土俵の上で論じることが可能になった。

3. 日本語アクセントの多様性

「ピッチアクセント」という類型概念そのものを否定する考え方を提案した Hyman（2006）は，語レベルの音韻的なプロミネンスに着目して「ストレス言語」と「トーン（声調）言語」の二つの類型を提案している。具体的には，(4) の 2 特徴を満たすものが「ストレス（言語）」，これらを満たさないものが「トーン（言語）」と示唆している。

(4) a. Obligatoriness（1 語に必ず一つは音韻的なプロミネンスがある）
b. Culminativity（1 語には複数の音韻的プロミネンスは存在しない）

ところが日本語諸方言を分析してみると，英語と同じように（4a, b）を満たす体系（たとえば都城方言）も，（4b）だけを満たす体系（たとえば東京方言）も存在する。さらに重要なことに，（4a）を満たすかどうかが研究者の分析次第で決まるという性格を持っているために（Kubozono 2012a），鹿児島方言や甑島方言のように，分析次第でどこに属すかが変わってくる方言も存在する（表 1）。

表 1　Hyman（2006）の類型説と日本語方言アクセント

	［＋culminative］	［－culminative］
［＋obligatory］	英語，ドイツ語… 都城方言 鹿児島方言（？）	甑島方言（？）
［－obligatory］	東京方言，近畿方言 鹿児島方言（？）	甑島方言（？）

鹿児島方言を例にとると，この方言には A 型と B 型と呼ばれる二つのアクセント型（5）が存在する。いわゆる 2 型アクセント体系（Uwano 1999）である（［はピッチの上昇位置を，］は下降位置を表す）。

(5) a. A 型
［ア］カ（赤），アカ［シン］ゴー（赤信号）
b. B 型

ア[オ（青），アオシン[ゴー（青信号）

伝統的な研究ではA型は語末から二つ目の音節が高くなり，B型は語末音節が高くなるという分析が一般的である（平山1951）。あるいは，A型とB型はピッチ上昇の位置が異なるという分析も可能である。これらの分析では，A型とB型が高声調（High tone）の位置で対立することになり，Hyman（2006）の類型に当てはめると「高声調という音韻的プロミネンスが1語に必ず一つ現れる体系」，つまり［＋obligatory, ＋culminative］というタイプに分類される。

これに対し，鹿児島方言のA型とB型を位置の対立ではなく，アクセント（核）の有無の対立と見ることも可能である（Shibatani 1990, Ishihara 2004）。この分析ではピッチ下降の有無が弁別的な特徴とされ，A型はピッチ下降を伴うアクセント型（accented），B型はピッチ下降を伴わない無アクセント型（unaccented）とみなされる。後者は東京方言の平板型に対応するアクセント型である。この分析を採用すると，鹿児島方言のアクセント体系は無アクセントのタイプを許容する体系，つまりHyman（2006）の類型では東京方言と同じように［－obligatory, ＋culminative］という体系となる。

同様のあいまい性が鹿児島方言の姉妹方言である甑島方言にも存在する。鹿児島方言と違い，この方言は1語に複数のアクセントの山（重起伏）が許容される体系を持ち，その複数の山がともに語彙的な特性を持つ（Kubozono 2012c，窪薗 2012d）。一つの語に複数のプロミネンスがあることから［－culminative］という特性を持つことになるが，さらにB型がアクセントを持っている（accented）とみなされるか，持っていない語（unaccented）とみなされるかによって，［＋obligatory, －culminative］という体系と［－obligatory, －culminative］という体系の両方に解釈できる。このように見てくると，日本語の中には，Hymanのいう「ストレス（言語）」とみなされる体系も，「トーン（言語）」とみなされる体系も存在していることがわかるのである。

4.　Tonal densityと日本語アクセント

Hymanの研究と並んで興味深いのがGussenhoven（2004）が提唱するtonal density（トーン指定の密度）の考え方である。これは言語をトーン，ピッチアクセント，イントネーションなどのように大別せず，ピッチが語や文の中にどのくらい密に（densely）指定されているかという基準で言語を記述・比較しようとするものである。中国語（北京官話）のようなアジア的なトーン言語では音節単位でのピッチ指定が必要となるのに対し，バンツー諸語に代表されるアフリカのトーン言語では形態素レベルかそれより大きな単位での指定が必要となる。英語のようないわゆるイントネーション言語では，ピッチが文レベルで緩やかに（sparsely）指定されていると分析される。

この考え方でいくと，日本語諸方言のピッチアクセント体系は，バンツー諸語の体系に似たものから英語の体系に似たものまで，tonal densityという数直線上の連続体として捉え直すことができるようになる。これは，Uwano（1999）に提案されている日本語アクセントの

類型（多型，N 型，無型）や早田（1999）が提案した類型（word tone 対 word accent）にも通じる考え方である。Word tone（語声調）と呼ばれる体系では語全体に対して 1 個ないしは複数個のメロディーが付与され，一方，word accent（語アクセント）と呼ばれる体系では語の特定の位置（音節，モーラ）に対して音韻的なプロミネンス（アクセント）が付与される。前者では語が長くなっても対立の数は増えず，後者では語が長くなるにつれて対立の数が増える（上野氏の「N 型と多型」の違いにほぼ対応する）。

この一方で，日本語の方言アクセントを詳細に見てみると，上記のような類型，分類では捉えきれないような多様性が見えてくる。日本語の諸方言は次のような点において多様性を見せ，これらの特徴がお互い独立して機能しているようなのである（Kubozono 2012b）。

（6） a. 1 語に複数のプロミネンスの山が生じる（重起伏）か否か
b. ピッチの付与単位が音節かモーラか
c. ピッチの上昇と下降のいずれが弁別的か
d. 複合語アクセントが左側（語頭）要素，右側（語末）要素のいずれによって決まるか

このように見てみると，語アクセントに見られる日本語諸方言の多様性は世界の言語に類を見ないものであり，さらなる研究によって世界のプロソディー研究，言語類型論研究に大きく貢献する可能性を秘めていることがわかる。

●参照文献●

Gussenhoven, Carlos（2004） *The phonology of tone and intonation*. Cambridge: Cambridge University Press.
早田輝洋（1999）『音調のタイポロジー』東京：大修館書店.
平山輝男（1951）『九州方言音調の研究』東京：学界之指針社.
Hyman, Larry M.（2006） Word-prosodic typology. *Phonology* 23: 225−257.
Igarashi, Yosuke（2012） Prosodic typology in Japanese dialects from a cross-linguistic perspective. *Lingua* 123（13）: 1441−1453.
Ishihara, Shun'ichi（2004） *An acoustic-phonetic descriptive analysis of Kagoshima Japanese tonal phenomena*. Doctoral dissertation, Australia National University.
Kubozono, Haruo（2012a） Introduction: Special issue on varieties of pitch accent systems. *Lingua* 122（13）: 1325−1334.
Kubozono, Haruo（2012b） Varieties of pitch accent systems in Japanese. *Lingua* 122（13）: 1395−1414.
Kubozono, Haruo（2012c） Word-level vs. sentence-level prosody in Koshikijima Japanese. *The Linguistic Review* 29: 109−130.
窪薗晴夫（2012d）「鹿児島県甑島方言のアクセント」『音声研究』16（1）: 93−104.
Shibatani, Masayoshi（1990） *The languages of Japan*. Cambridge: Cambridge University Press.
Uwano, Zendo（1999） Classification of Japanese accent systems. In: *Proceedings of the Symposium 'Cross-Linguistic Studies on Tonal Phenomena, Tonogenesis, Typology, and Related Topics'*. 51−186. Tokyo: ILCAA.
Uwano, Zendo（2012） Three types of accent kernels in Japanese. *Lingua* 123（13）: 1415−1440.

【補遺 1】国際シンポジウム（＋主要テーマ）

詳細については http://www.ninjal.ac.jp/phonology/IntlConference/ を参照。

・ISAT 2010（International Symposium on Accent and Tone）
於国語研，2010 年 12 月 19 日～20 日。
（1） Typology of prosodic systems
（2） Prosodic systems of endangered languages and dialects

・GemCon 2011（International Workshop on Geminate Consonants）
於神戸大学，2011 年 1 月 8 日～9 日。
（1）The phonetics and phonology of geminate consonants in Japanese, especially in loanwords

・ICPP 2011（The 1st International Conference on Phonetics and Phonology）
於京都大学，2011 年 12 月 10 日～14 日。
（1） *rendaku* and voicing
（2） *sokuon*, or geminate consonants: special sessions on 'Cross-linguistic Studies of Geminate Consonants', 'Phonetics and Phonology of Geminate Consonants'
（3） accent and tone: special session on 'Loanword Prosody'

・ICPP 2013（The 2nd International Conference on Phonetics and Phonology）
於国語研，2013 年 1 月 25 日～27 日。
（1） *rendaku* and voicing
（2） *sokuon*, or geminate consonants
（3） accent and tone: special session on 'Tonal Neutralization'

・3rd ICPP（The 3rd International Conference on Phonetics and Phonology）
於国語研，2013 年 12 月 20 日～22 日。
（1） *rendaku* and voicing
（2） *sokuon*, or geminate consonants
（3） accent and tone: special session on 'Tonal Change'

【補遺 2】主な刊行物

詳細については http://www.ninjal.ac.jp/phonology/05_publications/ を参照。

・Kubozono, Haruo（ed.）（2012） Special issue on 'Varieties of pitch accent systems', *Lingua* 122 巻 13 号.
・Kubozono, Haruo（ed.）（2013） Special issue on 'Japanese Geminate Obstruents', *Journal of East Asian Linguistics* 22 巻 4 号.
・Kubozono, Haruo（2013） Japanese word accent. *Oxford Bibliographies Online*（OBO）. Oxford University Press.
・Kubozono, Haruo（ed.）（forthcoming） *Mouton handbook of Japanese phonetics and phonology*（全 19 章）, Mouton de Gruyter.
・Classified Bibliographies:「アクセント」,「促音」
http://www.ninjal.ac.jp/phonology/bibiography/

《要旨》 日本語諸方言のアクセント体系が高さ（ピッチ）にもとづく「ピッチアクセント体系」であることは日本語音声研究の中で常識とされていることであるが，日本語以外の言語から見ると必ずしも自明のこととは言えない。実際,「ピッチアクセント体系（言語）」という類型概念そのものを否定する研究者も数多い。本稿は，2010 年に本プロジェクトが主催した国際シンポジウム ISAT 2010 の成果（*Lingua* 122 特集号）の一部を報告する形で，

日本語の研究が一般言語学や言語類型論に貢献できる可能性を指摘する。

Abstract: It is taken for granted in the studies of Japanese phonology and prosody that standard Tokyo Japanese and other dialects of the language have 'pitch-accent systems.' However, the notion of pitch accent as a typological category is not widely accepted in general linguistics or in typological studies of language. In fact, quite a few phonologists have expressed their concerns about the idea that 'pitch accent' constitutes an independent prosodic category. Challenging this new criticism in phonological studies, this article reports on the output of the ISAT 2010, an international conference that this project organized in 2010, and thereby explores how the prosodic studies of Japanese dialects can shed new light on the development of general linguistics and typological studies of language.

窪薗 晴夫（くぼぞの・はるお）

国立国語研究所理論・構造研究系教授。Ph. D.（言語学）（エジンバラ大学）。南山大学助教授，大阪外国語大学助教授，神戸大学教授を経て 2010 年 4 月より現職。

主な著書・論文：『アクセントの法則』（岩波科学ライブラリー 118, 岩波書店, 2006），『数字とことばの不思議な話』（岩波ジュニア新書 684，岩波書店，2011），Japanese accent（*The Oxford handbook of Japanese linguistics*, Oxford University Press, 2008），Accentuation of alphabetic acronyms in varieties of Japanese（*Lingua* 120, 2010），Word-level vs. sentence-level prosody in Koshikijima Japanese（*The Linguistic Review* 29, 2012）.

受賞：市河賞（財団法人語学教育研究所，1995），金田一京助博士記念賞（金田一京助博士記念会，1997）.

社会活動：日本言語学会評議員・常任委員，日本音声学会理事・企画委員長・評議員，日本音響学会査読委員，*Natural Language and Linguistic Theory* 誌編集委員, Advisory editor, Oxford Studies in Phonology and Phonetics series（Oxford University Press），Executive committee member, The Association for Laboratory Phonology，市河三喜賞選考委員，理化学研究所客員研究員，日本学術会議連携会員，台湾東呉大学客員教授.

基幹型共同研究プロジェクト「日本語レキシコンの音韻特性」
プロジェクトリーダー　窪薗晴夫（国立国語研究所 理論・構造研究系 教授）

プロジェクトの概要

本プロジェクトは，促音とアクセントを中心に日本語の音声・音韻構造を考察し，世界の言語の中における日本語の特徴を明らかにしようとするものである。促音については，主に外来語に促音が生起する条件およびその音声学・音韻論的要因を明らかにすることにより，日本語のリズム構造，日本語話者の知覚メカニズムを解明する。この成果は，日本語教育や言語障害教育に応用することが期待できる。アクセントについては，韓国語，中国語，スワヒリ語をはじめとする他の言語との比較対照を基調に，日本語諸方言が持つ多様なアクセント体系を世界の声調，アクセント言語の中で位置づける。